

## バラに込めた核廃絶

ウクライナ侵攻から2年。状況は「反転攻勢息切れ、正念場」(24日朝刊)でゼレンスキー大統領は「支援なければ敗北」(同夕刊)と危機感を表明。国連は機能不全に陥って総会決議すら出せない。本紙は「和平への道筋をつけよ」(24日社説)と主張するが、道は見えない。

自民党の裏金事件、「焦る首相 窮余の奇策」(29日朝刊)で衆院政治倫理審査会が全面公開に。岸田文雄首相は自らの指導力で局面打開を図ったつもりだったが、新事実もなく与党内からいぶかる声も。旧派閣幹部の説明も口裏合わせと自己保身に終始し説明責任と疑惑の解明には程遠い。有権者が望むのは政治資金の透明化。「調査研究広報滞在費」(旧・文書通信交通滞在費)など、いびつな議員特権の解消だ。政倫審をふまえ、法制度がどう改正されるのか。抜け道だらけのルールを温存すれば派閥は再生し、裏金議員の跋扈を許す。自民党の宿痼は深く、自浄能力が問われる。

2月は力の入った連載企画がいくつもあつたが、胸を突かれたのは「語り継がねば／第五福竜丸被ばく70年」(20日から3回)だ。1954年ビキニ環礁で米の水爆実験に遭遇し乗組員の久保山愛吉さんが亡くなった。その核廃絶の願いを込めてまず夫人から鉢植えのバラを80年代に継承したのは高知県幡多の高校生たち。彼ら「幡多ゼミ」による漁船乗組員からの聞き取りは被ばくの実態調査に貴重な成果をあげた。その後、焼津、幡多に加えて沖縄高校生平和ゼミ、福島原発事故を伝える「伝言館」へとバラに平和の願いを込めたネットワークが広がった。今月27、28日には焼津市で「全国高校生平和集会」が開かれる。

未来を担う若者たちは焼津に集い核廃絶の仲間づくりにまい進する。それこそ久保山さん夫妻が起点になって紡いだ「核廃絶バラの伝言」(22日朝刊)の成果である。

70年前の記憶を掘り起こし平和をめざす高校生たち。他方、国会ではわずか1、2年前の数千万円もの使途を「忘れた」「不明」とうそぶく議員たち。高校生に恥ずかしくないのか。(静岡文化芸術大学名誉教授)